

題目：集団間比較 VS 集団内関係：

社会生態学的環境構造が集団選択基準に与える影響

氏名：飯田 ちひろ

指導教官：結城 雅樹

本研究では、関係流動性 (Yuki et al., 2007)、すなわち関係形成可能な集団の選択肢の多寡によって、集団の選択時の基準がどのように異なるかを検証した。

関係を形成できる集団の選択肢が多く、所属する集団を自由に選べる高関係流動状況では、新しい集団に属する機会が多い。たくさんの集団の中から、集団同士を比較し、より望ましい集団や自分の好みや目標と合致する集団を選択していくことが比較的容易な社会環境であると考えられる。つまり、関係流動性が高い状況においては、人々が集団の相対的な比較をするということが、適応的な行動戦略になると考えられる。よって、関係流動性が高い状況では、人々は集団選択の際に複数集団の相対的な比較を行うだろう。一方、関係を形成できる集団の選択肢が少なく、限られている低関係流動状況では、新しい集団に属する機会が少ない。より望ましい集団や自分の好みや目標と合致する集団を選択していくことが比較的困難な社会環境であると考えられる。集団の比較にコストをかけるよりも、集団内の関係性に着目し、良好な関係性を維持し続けることにコストをかける方が、適応的であると考えられる。つまり、関係流動性が低い状況においては、人々は複数集団の比較よりも、その集団内で良好な関係を形成できるかに着目することが、適応的な行動戦略になると考えられる。よって、関係流動性が低い状況では、集団の選択の基準として、複数集団の相対的な比較よりも、集団内の対人関係の良好さの絶対評価がより重要とされるだろう。

これらの仮説を検証するため、日米大学生を対象とした質問紙実験を行った。条件（初期選択条件／継続選択条件）と選択対象（集団／友人）を組み合わせた 4 種類のシナリオごとに、集団の選択の基準として、相対評価 3 項目（類似・能力・相対的協力度）と絶対評価 1 項目（絶対協力度）をどの程度重視するか測定した。

まず、各国・条件における関係流動性評価を確認したところ、日本では初期選択条件は高関係流動性状況、継続選択条件は低関係流動性状況とみなされていたが、アメリカでは、初期選択条件も継続選択条件も共に高関係流動性状況とみなされていた。それを元に、それぞれの状況で集団の選択時に各基準がどれだけ重視されるかを検討したところ、高関係流動性状況では集団の相対的比較を重視するが、低関係流動性状況ではしないという、予測と一貫する結果が得られた。